

令和8年4月20日

令和8年度病害虫防除技術情報（第1号）

和歌山県農作物病害虫防除所

トマトキバガによる被害の初確認について

トマトキバガによる施設栽培ミニトマトへの被害が県内で初めて確認されました。本虫は葉の食害だけでなく果実内部への食入により傷等が生じるとともに腐敗が発生することもあります。誘殺数も増加していますので、早期発見・早期防除を徹底しましょう。

1. 病害虫名：トマトキバガ *Tuta absoluta* (Meyrick)
2. 対象作物：トマト、ミニトマト、ピーマン、ナス、タバコ、バレイショ等
3. 発生地域：県内全域
4. 発生確認の経過および県内外での発生状況

令和4年5月下旬に日高郡印南町のフェロモントラップで成虫の誘殺が初めて確認され、その後紀の川市のフェロモントラップでも誘殺が確認されるなど、誘殺数は年々増加している（図1）。令和8年3月中旬に御坊市の施設栽培ミニトマトで葉の食害と幼虫が確認されたため、神戸植物防疫所に同定を依頼したところ、トマトキバガであり、県内初の被害発生であった。

5. 形態および生態

1) 形態

成虫の体長は5~7 mm（開張約10 mm）で、前翅は灰褐色に黒色斑が散在する（図2）。幼虫は終齢で約8 mm、体色は淡緑色~淡赤白色で、前胸背面後縁に黒色横帯を有する（図3）。

2) 生態

年間複数世代（南米では10~12世代）発生し、繁殖力が高い。卵から成虫までの期間は24~38日で、発育下限温度は8℃である。成虫は夜行性で、雌は平均約260個の卵を葉裏に産み付ける。幼虫は4齢を経て土中または葉面で蛹化する。

3) 被害

トマトでは、幼虫が葉の内部に潜り込んで食害し、食害部分は薄皮状となり、葉の色が白色~褐色に変色する（図4）。また、果実への食入により傷等が生じるとともに腐敗が発生する（図5）。なお、葉の被害は、ハモグリバエ類による被害と類似するが、ハモグリバエ類が線状の食痕を残すのに対し（図6）、本虫は面的に食害する点で区別できる。

4) 寄主植物

トマト、ピーマン、ナス、タバコ、バレイショなどのナス科植物が主要な寄主植物であるが、マメ科のインゲンマメも寄主植物として確認されている。

5) その他

海外では、ピレスロイド系やジアミド系などの殺虫剤に対する抵抗性を獲得した個体群の発生が確認されている。

6. 防除対策

- 1) 施設栽培トマトおよびミニトマトでは、タバココナジラミの侵入防止を兼ねて、施設開口部に目合い0.4 mm以下の防虫ネットを展張し、侵入を防止する。

- 2) ほ場内をよく見回り、早期発見に努める。
- 3) 被害葉や被害果、裂果等の残さはほ場内やその周辺に放置せず速やかに除去し、適切に処分する。
- 4) ほ場内で発生が認められた場合は、発生を拡大させないため、本虫に適用のある薬剤を速やかに散布する。薬剤防除にあたっては、薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション散布を行う。
- 5) 薬剤については、最新の登録情報（農林水産省農薬登録情報提供システム <https://pesticide.maff.go.jp/>）を参照し、適正に使用する。

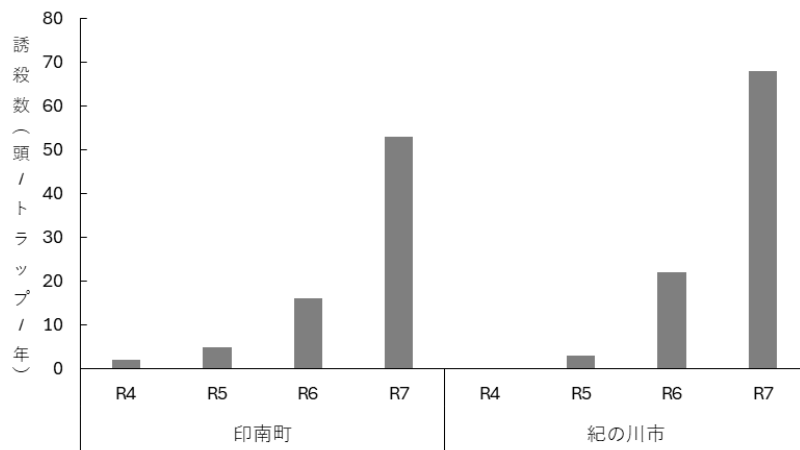


図1 フェロモントラップの年別累計誘殺数



図2 トマトキバガ成虫



図3 トマトキバガ幼虫



図4 トマトキバガ食害痕



図5 トマトキバガ幼虫による果実の食害
(熊本県病害虫防除所 原図)



図6 ハモグリバエ類食害痕

和歌山県農作物病害虫防除所
電話：0736(64)2300